

2020/12/12-rewrite

(うと Q 世話し 修正版 当 series の書き方 )

拙著「ニューノーマル探索サバイバル日記」をコロナ渦同時進行執筆の形で書き始めたそもそもの発端は、長年の観察から

「我々を自縄自縛に陥れ、皆を苦しめているのは、今迄に累積され岩盤の様な強度を持った「過度の美意識=style」の塊。

その裏返しで「未達は恥。様=style にならん、不様」の一言。

見た目を重んじ、その悪さを忌み嫌う無言の圧力」

それに対して多少なりとも NO を突きつけたいのには、その剣を持たない「悔しさ」からでした。

それでその剣になればと拙著を書き始めた訳です。

その折、形崩しに、前の記事との辻褄の不合や矛盾が生じても無理に合わせず、左右対称、首尾一貫等の様式美を脇に置いて、その時々思った有りの儘を「出物腫れ物出たところ勝負」の「同時進行執筆日記」の形で書き始めました。

「隔靴搔痒」「二人羽織」や「木で鼻を括る」様な意に反する事ばかりで思い通りにならないのが常の現実世界。

「読み易く」「頭にも入り易い」「それで納得」という様な story 展開が全くない、その現実態に合わせよう思ったのです。

しかしその一方、我々の心の奥深くには、美意識由来の「期待を裏切ったら許さないわよ」が常にあり、且つその「そうならなきゃおかしいわよ」筋書きの成就を、相手にどんな事情があっても許す事なく「言外や無言で強要」する傾向を強く感じたのも事実。

確かに「やらせ」をでっち上げる mass-media も悪いですが「お涙頂戴や、今明かされる感動秘話」を無言の内に期待し強要しているのは、むしろ我々の方である可能性が高い気がして

「彼らは単なる needs 請負人では？」

と日記書き始めの当初から思い始めておりました。

なので、この series は、上述の「美意識から逆算された筋書き要求」を自覚的に抑え「その時ゲリラ的に思った事」と「その後、生起した行動」のみを style に落とし込まずに書いてみようと思った次第。

このゲリラ戦法は「例外を許さない様式美」を崩す上で、更に出た処勝負は「現実で、どちらに転がるかは rugby ball のその時次第」の捕捉率を up する上で、ICHIRO の言を借りれば「hit を打つには、常にその直前の球筋の軌道変化を読んで合わせるしかありません。それを為し得るのは日々の地道な練習を常態(normal)とする事だけです」に倣い

それを書き物に 응용するのも面白いのでは？と思つき

「同時進行執筆日記」

という形で著させて戴きました。

言葉足らずとは存じますがご理解の程、宜敷くお願い申し上げます。